

運動の認知過程（知覚、注意、記憶、判断、言語）を活性化させ、円滑な身体運動を運動学習的に捉えようとする認知運動療法は、中枢神経系疾患、骨関節系疾患に対する新しい理学療法アプローチ法の1つとして関心を集めている。認知運動療法が広く臨床に適應されるには、今後、脳科学からの理論的な構築と長期的な臨床効果の検証を重ねることが重要である。そこで本特集では、日々、認知運動療法に取り組まれている方々から、事例を通して具体的な治療プログラムの立案根拠とその効果、課題を明らかにしていただくことを目的とした。

■脳卒中片麻痺に対する認知運動療法の臨床アプローチと効果（高橋昭彦論文）

認知運動療法では、観察、最終的に期待される改善、ワークユニットの選定という過程を経て実際の治療に至るが、これらすべての過程は患者の認知機能に基づいて実施される。本稿ではサントルソ認知神経リハビリテーションセンターで経験した脳卒中片麻痺患者を提示し、認知運動療法の臨床アプローチと効果について、セラピストの思考の展開を中心に概説する。

■症例報告：高次脳機能障害を伴う片麻痺に対する認知運動療法（岩崎正子論文）

失行の病態はニューロイメージング技術の進歩により、実証的に解釈されるようになってきているが、有効なリハビリテーション治療は確立していないのが現状である。Perfetti は、失行の病態を運動学習における認知過程の障害と捉え、大脳皮質の情報変換過程を重視する立場からの治療を提唱している。頭頂葉の異種感覚統合のモデルから感覚情報の変換を応用した治療介入の仮説として、身体をテーマにした空間の認知的な治療を「視覚を使った課題」と「体性感覚を使った課題」として提示し考察した。

■骨関節疾患に対する認知運動療法の臨床アプローチと効果（千鳥司浩論文）

骨関節疾患では、筋や関節の力学的・実行器官としての損傷だけでなく、情報器官としての機能も変質していることが多い。この情報器官の機能低下により、運動命令を出す中枢神経系にも変質が及び、代償運動や運動ストラテジーの異常が出現している。本稿では、臨床で問題となりやすい関節可動域制限や跛行を有する症例を例にあげ、病態の解釈について解説した上で、具体的な認知運動療法の治療戦略について紹介する。

■症例報告：両下肢切断患者が抱える幻肢痛に対する認知運動療法（小林弘基、他論文）

切断後の患者に起こる特有の症状として幻肢痛が挙げられるが、それに対する原因の特定や明確な治療アプローチは確立されていない。今回脳科学の知見から病態を解釈した上で認知運動療法を段階的に進め、義足を通じて世界に意味を与えるための身体の機能回復を目指した。特に断端部での知覚情報に着目した認知課題を行い、切断後の身体イメージの形成と幻肢痛の変化を中心に述べる。

■脳性麻痺児に対する認知運動療法の臨床アプローチと効果（人見眞理論文）

認知運動療法は、身体に表出される行為から経験と脳の関係性（病的な状態）を解釈し、身体を通して経験の質を変えることによって脳を改変することを目指す理論と実践方法である。本論では、「脳性麻痺」という障害像の解釈とリハビリテーションアプローチの方向性を明示する。また、彼らの経験の質を知るための手がかりを得るところから治療実施までの実際に即しながら、セラピスト側の思考プロセスを中心に述べる。

■症例報告：脳性麻痺の新生児・乳幼児からの認知運動療法（浅野大喜論文）

出生後早期からの認知運動療法について、まず従来の新生児・小児リハビリテーションとの相違について解説し、症例を提示しながら具体的なアプローチ方法と効果について報告した。小児分野においても内部観察的視点を持った評価とアプローチが必要であり、対人を含めた外界と相互作用しながら、身体図式や身体イメージさらには自己を発達させていくことができるように援助することが重要である。

とびらページの書道作品について

「欲無ければ一切足り、求むる有れば萬事窮す」（良寛）